

空調系統向け提案強める

ノーラエンジン ジグ 雨水用途拡大で生産増強



堀田 幸兵社長

ンと使用材料の削減、さらには環境負荷低減、施工性の改善といった多様な効果が期待でき、プレハブ加工による品質の安定化、高耐久性・高耐震性など定量・定性両面での大きなメリットが得られるという。

今期(2019年3月期)、これまでの受注推移は「SUS430LX」については雨水配管用途で多くの納入実績を確保でき、引き続き増加傾向にある。首都圏の大規模再開発事業をはじめ、関西エリアでも採用事例が

増勢基調にあり、すでに5億円近い実績を達成しており、通期では7億円の売上を確保できる(堀田社長)と見る。

一般に給水・給湯など衛生系統ではニッケルを含むオーステナイト系ステンレス鋼管が採用され、空調系統の冷温水配管にはSGPが使用されているが、このSGPにつきまとうのが腐食の問題。そこで腐食の問題解決としてフェライト系ステンレス鋼管の採用を現実的な選択肢としてノーラエンジンジグが提案に取り組んでいる。

フェライト系ステンレス鋼は水配管で要求される耐食性を確保しており、適切な環境で使用すれば錆びにくく、優れた

特性を發揮する。SUS430LXは約17%のクロムと約0.3%のチタンを含み、一般にSGPの寿命15~20年に対して30~40年という優れた耐食性を實現している。

空調系統配管にSUS430LXが適用されれば、優れた特性がより良い形で發揮されると考えられるが、冷温水配管に適用されるには、もう少しばらつきがかかるという。堀田社長は「一般的に密閉回路での使用であれば問題ないが、極端なアルカリ性や高塩素濃度、あるいは溶存酸素が多量に含まれる場合、空調機内の熱交わりに少量使われているSGPが優先的に腐食を引き起こす懸念がある」と説明す

る。430LX採用現場の水質調査を行っているが、施主のご意向もあり、往々にして調査に時間がかかる。とはいえ、着実に進めてはいるので、技術的なデータを積み上げ、採用する際の留意事項などきめ細かく提案できるように態勢を固めたい」と話す。

冷温水用途での基礎固めと並行して雨水配管での採用が続伸していることから、同社ではフェライト系ステンレス配管の増産に乗り出す。既存の生産ラインを増強し、「生産計画としては倍増を目指す(同)という。同配管でオンリーワンのポジションにあるノーラエンジンジグは、更なる高みに一歩踏み出す。

ステンレス配管大手のノーラエンジンジグ(社長 堀田幸兵氏、東京都本社・東京都千代田区)では、戦略商品に位置付けるフェライト系ステンレス配管システム「NFS(S)ノーラ・フェライト・システム」工法の受注拡大を目指し、積極的な提案活動を展開している。

NFS工法とは、建築設備向けでは世界初のニッケルを含まないステンレス鋼管「SUS430LX」と、新たなコンセプトを持つノーラエンジンジグ独自のつばだし管接手「CFジョイント」をプレハブ加工したフェライト系ステンレス配管システム。SGP(配管用炭素鋼管)からの切り替えが難しかった雨水・空調・蒸気やVLP鋼管(塩化ビニルライニング鋼管)が一般に使用されている給水・給湯など衛生用途でのオールステンレス配管システムの実現を目指すものだ。

SUS430LXとCFジョイントの両者を組み合わせることで軽量化による大幅なコストダウン